

安井息軒「題蘭相如奉璧函」

眇然小丈夫耳。力不足以維鷄、貌不  
 足以加人。而浩氣所發、滿堂惛伏、以秦  
 王之暴不能少折其節。終完璧以還。甚  
 矣、氣之能伸万物之上也。然氣生於志、  
 志奮於義。義苟失矣、匹夫猶且侮之。安  
 能逞於虎狼之秦哉。相如唯知此義也。  
 故他日屈於廉頗、如四肢無骨、亦能  
 使頗肉袒謝罪、而趙國賴以安。世之悻  
 悻者、独快其折秦、而不知其所以能折  
 之、則別有在焉。抑末矣。



安井息軒像  
(宮崎県立図書館前)

安井息軒「題二藺相如 奉レ璧 図」

〈出典〉『息軒遺文』巻三

〈著者〉 安井息軒（一七九九～一八七六）

日向国清武郷（現宮崎県宮崎市清武）に生まれた。大坂・江戸（昌平坂学問所）で学んだ後、飢肥藩の藩校・振徳堂で教えた。一八三七（天保八）年、江戸に出て、翌年、三計執を開き、多くの門人を教えた。その学問は江戸期儒学の集大成と評され、門人には谷干城や陸奥宗光ら、明治期に活躍した人物も多い。森鷗外は、安井息軒と妻佐代をモデルに、小説「安井夫人」を書いている。

〈書き下し文〉

眇然たる小丈夫なるのみ。力は以て鶏を維ぐに足らず、貌は以て人に加ふるに足らず。而るに浩気の発する所、満堂摺伏し、秦王の暴を以てするも少しも其の節を折く能はず。終に璧を完うして以て還る。甚だしきかな、気の能く万物の上に伸ぶるや。然れども気は志に生じ、志は義に奮ふ。義苟しくも失はるれば、匹夫すら猶ほ且つ之を侮る。安くんぞ能く虎狼の秦に逞しくせんや。相如は唯だ此の義を知るのみ。故に他日廉頗に屈し、四体の骨無きがごときも、亦た能く頗をして肉袒して罪を謝せしめ、而して趙国頼りて以て安し。世の悻悻たる者、独り其の秦を折くを快として、其の能く之を折く所以は、則ち別に在ること有るを知らず。抑未なり。

〈現代語訳〉

藺相如は、本当に小柄な小男である。力は弱過ぎて鶏を引つ張って支えることもできないし、顔は弱々しくて人に威圧を加えることもできない。それなのに、彼が道徳的勇気を発すると、宮殿のすべての人々がそれにひれ伏し、横暴な秦王でも彼の節操を曲げることは少しもできなかった。結局、相如は和氏の璧を秦に奪われることなく趙に帰った。すばらしいなあ、相如の気力が万物の上に広がっているではないか。けれども、気力はその人の志から生じるものであり、志は正義によって奮い立つものである。もしも正義が失われるならば、つまらない人物でさえ正義を失った人を見下す。〔補〕だから、正義を伴わない人が、～まして、どうして虎や狼のように恐ろしい秦に対して思い通りに振る舞うことができるだろうか、いや、できるはずがない。相如はひたすらこの正義の力を知っていたのである。

だから、後日廉頗に屈して、まるで身体に骨が無いかのようにであつても、また頗に片脱ぎ（＝降伏する時の姿）で謝罪させることができて、そうして趙の国は二人を頼りとして安泰だった。趙の秦への怒りに共感する世の中の人々は、藺相如が秦を屈服させたことだけを心地よく思つて、相如が秦を屈服させた理由は、怒りとは別にあることを理解していない。そもそも、怒りは「完璧」の故事の中で大切とではないのだ。